研究論文

ベルサーニをトランスする
――ベルサーニのクィア理論における トランスリーディングの可能性

古怒田望人

要旨

本論の目的は、レオ・ベルサーニのクィア理論の内に、トランスジェンダー研究の観点を見出すことにある。確かに、ベルサーニの理論はゲイ男性中心主義的であると批判されてきたが、彼の理論はトランスジェンダー研究の観点を含意する射程を有している。

第一節では、『フロイト的身体』（1986）におけるフロイトのセクシュアリティ論に関するベルサーニの解釈をトランスジェンダーの観点から読解する。この読解を通じて、彼のセクシュアリティに関する理論が、トランスジェンダーの人々が生きうるセクシュアリティの構造を内包するものであることを明らかにする。

第二節では、「ホモネス」と呼ばれるベルサーニの関係性論を扱う。『ホモズ』（1995）において彼は、異性愛関係に根差す抑圧的な関係性とは別の仕方で繋がる「同じさ」を通じた関係性を、「ホモネス」という関係性概念から明らかにした。この概念をベルサーニは同性愛関係から具体化するが、同時に彼はこの概念を、同性愛関係を越えた仕方でも論じており、本論はそこにトランスジェンダー研究との交錯を見出す。

そこで、第三節では、「ホモネス」概念を、ゲイル・サラモンが『身体を引き受ける』（2010）で主題化した「ホモエラティックス」というトランスジェンダーに関する関係性概念から具体化する。この概念は、トランスジェンダーにおけるある種の同性愛関係を浮き彫りにするものであり、「ホモネス」概念を具体化するために適切な概念である。

最終節では、トランスジェンダー当事者の語りの分析を通じて、本論が浮き彫りにしてきたベルサーニの理論が、トランスジェンダーの肯定的な関係性の構造

を理論的に捉えるものとなることを証明し、彼の理論をトランスジェンダー研究に応用する意義を指摘する。

キーワード：
レオ・ベルサーニ、クィア理論、トランスジェンダー研究、ホモネス、ホモエラティックス

本論の目的は、L・ベルサーニのクィア理論の内に、トランスジェンダーに関する理論の可能性を見出すことにある。それにより、彼の理論を、トランスジェンダー研究の文脈に接続することを試みる。

このような試みに対しては、クィア理論が、ゲイ・レズビアン研究にある面で還元されてしまい、トランスジェンダーの存在を抹消した理論になってしまっているとトランスジェンダー研究から批判が向けられてきた。例えば、S・ストライカーは、「クィア研究はトランスジェンダーの課題を着手するのにもっとも適した場であり続けている一方で、たいていの場合クィアは「ゲイ」あるいは「レズビアン」の歪曲表現となっており、異性愛規範とは異なる主要な手段としてセクシュアル・オリエンテーションとセクシュアル・アイデンティティを優先付けるレンズを通してトランスジェンダーの現象はたいていの場合、誤解されている」と指摘する（Stryker, 2004, p.214、強調原典）。

この指摘に応じるように、ベルサーニのクィア理論に対しても、このトランスジェンダー研究によるクィア理論批判と同様の批判が向けられてきた。例えば、井芹真紀子は、彼の「直腸は墓場か？」（1987）を読解しつつ、同論文におけるゲイ男性の経験のクィアな「否定性」が、女性のような「「他者」の固定化と消去によって成立」していると論じ（井芹, 2013, p.47）、J・E・ムニョスは、彼の理論が「人種、ジェンダー、セクシュアリティ」の差異を不可視化する「北米のゲイ男性文化」に留まっていると批判する（Muñoz, 1905=2009, pp.34-35）。つまり、彼の理論はゲイ男性中心主義的な理論であると批判されてきたのだ。

本論は、このような先行研究の批判に対して、ベルサーニのクィア理論の枠組みとその射程が、むしろ、シスジェンダーのゲイ男性に限定されない、トランスジェンダーが生きる経験の構造――特に、彼ら、彼女らの肯定的な経験の構造を

浮き彫りにするものであることを証明し応答したい（尚、本論のこの試みは、トランスジェンダーのローカルな表象や語りの分析から展開される。この点で、ベルサーニの理論が「ヨーロッパ・アメリカ文学のカノン的なアーカイブ」に限定されているというJ・ハルバースタムの批判［Halberstam, 2008, p.152］に対しても、本論は応じるものでもある）。

本論は次のように展開する。まず、第一節ではベルサーニの『フロイト的身体』（1986）におけるフロイト論が、シスジェンダー中心主義に還元されないセクシュアリティの観点を含意することを論じ、彼の理論の「枠組み」におけるトランスリーディングの可能性を提示する。第二節では、この「枠組み」を通じてベルサーニが強調するセクシュアリティにおける自己瓦解の観点が、「ホモネス」と呼ばれる関係性の観点に開かれていることを論じ、彼の理論の「射程」を浮き彫りにする。続く第三節では、この彼の理論の「射程」が、G・サラモンが『身体を引き受ける』（2010）で主題化するトランスジェンダーが生きる関係性の構造から理解可能なことを論じる。そして、第四節では、トランスジェンダー当事者の語りの分析を通じて、本論が浮き彫りにしてきたベルサーニの理論が、トランスジェンダーの肯定的な関係性の構造を理論的に捉えるものとなることを証明し、彼の理論をトランスジェンダー研究に応用する意義を指摘する。

1 『フロイト的身体』におけるトランスネス
――ベルサーニの理論の枠組みの可能性

先に指摘したように、井芹は、ベルサーニの「直腸は墓場か？」における議論を読解し、彼の理論がゲイ男性中心主義に陥っていると批判している。本論はこのような井芹の批判に対して、同論文が理論的に依拠する『フロイト的身体』のセクシュアリティ論を読解したとき、ベルサーニの理論の枠組みの内に、シスジェンダー中心主義から逸脱するセクシュアリティの観点が見出されることを証明し、応答したい（また、ここから、次節でベルサーニの関係性論を論じるための足掛かりを作る）。そこで本節では、同著におけるS・フロイトの『セクシュアリティ理論のための三篇』[1]（1905、以下『セクシュアリティ三篇』）解釈を読

[1] 文脈に合わせて邦題の「性理論のための三篇」から改訳している。

解する。

『セクシュアリティ三篇』においてフロイトは、口唇や肛門に関わるセクシュアリティを性的倒錯と見なし排斥しつつ、人間のセクシュアリティの「正常形態」を「性器領域」に置き（フロイト, 1905=2009, p.266）、このような性器領域において「快を得ることが生殖という機能のために有利に働く」（フロイト, 1905=2009, p.253）と論じている。この点で、明かに彼は、性器を用いて異性間でなされる生殖に基づいてセクシュアリティを規範化し、他のセクシュアリティの可能性を抹消している。しかし、このような規範的観点から論じられる『セクシュアリティ三篇』について、ベルサーニは『フロイト的身体』で「全く異なった議論が展開されている」ことを指摘する（Bersani, 1986, p.39）。

この「全く異なった議論」を論じるためにまず、ベルサーニは、「対象発見とは本来、再発見なのである」（フロイト, 1905=2009, p.284）というフロイトの『セクシュアリティ三篇』における発言を、次のように解釈する。彼によれば、この発言は、性器領域をセクシュアリティの正常形態と定めるフロイトの態度とは裏腹に、そうしたセクシュアリティにおける対象発見が、性器期に先立つ口唇期や肛門期のような性器領域に限定されないセクシュアリティのある種の反復（「再発見」）であることを示唆している（cf. Bersani, 1986, p.35）。したがって、彼が指摘するのは、フロイト自身の理論の内部に、セクシュアリティに関する規範的観点を崩す理論が含意されているということだ。

ところで、フロイトは、「子供が母親の乳房を吸うことは、あらゆる愛情関係の祖型になっている」（フロイト, 1905=2009, p.284）と対象発見におけるある種の「起源」を定めているが、対象発見における反復は、このような起源的対象を捉えそこなう運動である。というのも、彼が記述するセクシュアリティの構造は、特定の対象や身体領域に限定づけられるものではないからだ。例えば、口唇的セクシュアリティ（具体的には「おしゃぶり」）についての彼の記述は多義的なもので、「口がとどく任意の場所の皮膚」（フロイト, 1905=2009, p.230）にまで広げられる。彼においてさえ、母親の乳房は「性源域としての唇を幼児が発見するための偶然的な原因」（Bersani, 1986, p.35）と見なされており、対象の「再発見」は、起源的対象を捉えそこなう反復とならざるをえない。

以上の点から、ベルサーニはフロイトの「再発見」に関する発言を以下のよう

に解釈する。

> 起源的対象を「再発見」しようとする努力は次のような布置への再帰の試みだろう。その布置とは、そこでいかなる対象も特権的ではない布置、そこであらゆる源からセクシュアリティが生じうる（私たちは、乳房に、親指に、身体が揺すられることに、思考等々に刺激を受けうる）布置、そして最後に、そこであらゆる身体の部分が潜在的な性源域である布置である。［…］〔フロイトによる〕人間のセクシュアリティへの探求は、対象の特定性からも、身体器官の特定性からも、セクシュアルなものが徹底的に分離される事態へと行き着く。（Bersani, 1986, p.39, 亀甲カッコ内引用者）

このようにフロイトのセクシュアリティ論は多義的な対象や身体性を通じて展開されており、彼の理論はセクシュアリティを特定の対象や身体領域から切り離す理論的帰結をもたらすものである。敷衍すれば、この理論的帰結は、出生時に割り当てられた「男」という性別に基づいて意味づけられたペニスという特定の身体領域から、異性愛者のシスジェンダー男性であることを期待、要求する規範から逸脱するセクシュアリティの可能性を示しているといえる。それゆえ、フロイトのセクシュアリティ論は、異性愛中心主義、そしてシスジェンダー中心主義から逸脱する理論として読み替え可能なのだ。実際、『セクシュアリティ三篇』において、性源域は「あらゆる身体部位および内臓の諸器官にも備わっている」と語られ（フロイト, 1905=2009, p.237）、「一段とすぐれた」性源域は「皮膚」という身体全域に広げられる（フロイト, 1905=2009, p.216）。

ベルサーニは、以上のようなフロイト読解を通じて、セクシュアリティの「位置づけ難さ」と呼びうる構造を引き出している。彼は、セクシュアリティを生殖のための性器へと限定するといった規範的観点による特定の身体領域への位置づけから横滑りするクィアなセクシュアリティの構造を、フロイトから提示するのだ。加えて、彼は、このようなセクシュアリティの「位置づけ難い」構造を、「セクシュアルなものへの感じやすさ＝感応性（susceptibility）」（Bersani, 1986, p.38）と呼ぶ。彼によれば、クィアなセクシュアリティは、特定の対象や身体領域に「位置づけ難い」がゆえに、あらゆる対象、身体領域がセクシュアルに触発

しうる「感応性」を含んでいるのである。

さらに、このようなセクシュアリティの構造を起点として、ベルサーニは、セクシュアリティを生きる「自己」の経験に目を向ける。彼は、「位置づけ難く」、「感じやすい」セクシュアリティを介して、「私たちは私たちを強く動揺させる（nearly shatter）ものを欲望する」（Bersani, 1986, p.39）と語る[2]。彼は、セクシュアリティを、特定の対象や身体領域に留まり切れず、どんな対象や身体領域もセクシュアルに触発する可能性を含む限りで、主体によって統御困難な現象と解釈するのだ。またこの点から、「セクシュアリティとは構成された自己にとって耐えがたいことだろう」（Bersani, 1986, p.38）と論じられる。つまり、セクシュアリティを何らかの仕方で統御しようとする主体性そのものが、当のセクシュアリティの経験から覆されるのだ。この意味で、彼にとって、セクシュアリティは、主体を快楽によって充足させる現象ではなく、むしろ、その「位置づけ難さ」や「感応性」を介して「自己」を崩す現象なのである。それはある面では、規範的に「構成された自己」を覆すことであるが、しかし彼の議論はそれ以上のことを含意している。彼によれば、「位置付けがたく」、「感じやすい」セクシュアリティの「多形倒錯的本性」とは「セクシュアリティへと自己瓦解すること」であり（Bersani, 1986, p.38）、言い換えれば、彼の議論におけるセクシュアリティは、その本性としてなんらかのアイデンティティを生きる「自己」を転覆させるものなのだ。すなわちそれは、異性愛・シスジェンダー中心主義から離れて――セクシュアル・オリエンテーションとジェンダー・アイデンティティのどちらについても――規範的か非規範的かの別を問わず、あらゆるアイデンティティをその射程とする理論なのだ。

以上の『フロイト的身体』におけるフロイト解釈に基づいて、ベルサーニは「直腸は墓場か？」におけるゲイ男性のアナルセックスに関する理論を展開する（cf. Bersani, 2010, pp.24-25）。彼は、ゲイ男性のアナルセックスの身体性（「直腸」）を「墓場」と呼びつつ、そこに「誇り高き主体性という男性性の理想像」、「内面化されたファルス的男性性」というアイデンティティが瓦解する「自己の

2　ベルサーニの術語である「shatter」は確かに「破砕」という「動揺」よりも強い意味で訳されるが（cf. 村山, 2005=2022）、本論ではこの術語の原語である「ébranlement」（cf. Bersani, 1986, p.38）の意味に立ち返りあえて「動揺」や「瓦解」と訳すことで「破砕」とは異なった経験の構造を浮き彫りにすることを試みる。

壊乱、自己の喪失」を見出す（Bersani, 2010, pp.29-30、強調原典）。確かに、一見すると彼のこの理論は、ゲイ男性のセクシュアリティにある種の否定性を一義的に付与し、特権化しているようにみえる。しかし、この理論は、前述のとおり異性愛中心主義だけではなくシスジェンダー中心主義からも逸脱するセクシュアリティの構造を提示する彼のフロイト論にそもそも基づいたものであり、理論の枠組みとしてシスジェンダーのゲイ男性に閉じられたものではない。したがって、ベルサーニのクィア理論は、トランスジェンダーに関する理論として拡張される可能性を内包しているのだ。

では、このようにセクシュアリティの内にある種の自己瓦解の契機を見出すベルサーニの理論は、具体的にどのようなトランスジェンダーの経験の構造を捉える「射程」をもつのだろうか。そこで次節では、彼が、このセクシュアリティにおける自己瓦解を起点として、ある種の関係性論を展開することを論じたい。さらにここから第三節と第四節では、この彼の関係性論が、トランスジェンダーが生きる関係性の構造から具体化されることを証明する。

2 「ホモネス」という関係性――ベルサーニの理論の「射程」

本節では、ベルサーニの『ホモズ』（1995）を読解することで、彼が指摘したセクシュアリティに根差す自己瓦解の構造が、「ホモネス」と呼ばれるクィアな関係性の契機となることをみる。そしてここから、次節と第四節では、この「ホモネス」が、トランスジェンダーが生きる関係性の構造を通じて具体化可能なことを論じたい。

この「ホモネス」の観点を論じるためにまず、『ホモズ』の約8年前に書かれた「直腸は墓場か？」において既に、ある種の関係性に関する問いが立てられていることを確認したい。ベルサーニは同論文において、J・ウィークスやG・ルービン、M・フーコーといった理論家たちが、「多様性」や「ライフ・スタイル」といった仕方で、セクシュアリティを「理想化」していると批判する（cf. Bersani, 2010, pp.25-29）。その批判の中で、彼は、セクシュアリティの実践が、権力関係を内面化したものであることを強調する。

人間の身体は次のような仕方で構築されている、あるいは少なくともこれ

までそう構築されてきた。それは、支配と従属を私たちのもっともはげしい快楽の経験と切り離すことがほとんど不可能な仕方によってである。このことはなによりもまず体位の問題である。種の再生産に（近年まで）必然的なものだった挿入は、もっとも一般的には男が女の上になることでなしとげられてきた。もしそうだとするならば、上になることは単なる物理的な位置の問題ではありえないということもまた真実である。[…] 私が言わんとしていることは次のことである。フーコーは関係それ自体に内在する権力の効果について論じてきたが […]、それはおそらくセックスにおいて、もっとも過激なものになりやすいし、支配と従属の関係へともっとも二極化しやすいということである […]。（Bersani, 2010, pp.22-23）

ベルサーニは、「正常位」のような「体位の問題」を、「単なる物理的な位置の問題」ではなく、「支配と従属」という権力関係が「セックス」の水準で内面化する問題として捉える。セクシュアリティを生殖に結びつける規範は、「正常位」という「体位」を介して身体化されており、その「体位」は「男が女の上になる」という権力関係を内面化させている。つまり彼は、セクシュアリティを「理想化」するのではなく、その身体経験が「支配と従属」という権力関係を実践してしまうというある種の暴力性を明るみに出すのだ。

このような権力関係を主題化することから分かるように、「直腸は墓場か？」の中でベルサーニは、セクシュアリティにおける「関係性」を重要な問いの一つとして取り上げている。そして、同論文において彼は、ゲイ男性のアナルセックスの分析を通じて、ある種の権力性を内面化した主体の動揺、瓦解を論じることで、権力関係を内面化した主体とは異なった「自己」の構造を描くことを試みた。では、このようなクィアなセクシュアリティを通じて自己瓦解する主体は、どのような関係性に開かれるのだろうか。

そこで、「直腸は墓場か？」の後に書かれた『ホモズ』において、ベルサーニが、『フロイト的身体』における自身の理論を参照しつつ展開する以下の関係性論を参照したい。

フロイトとフーコーにとって、もちろんそれぞれまったく異なった仕方で

はあるが、権力の実践が生み出すのは、その権力の実践それ自体の内部からの権力への抵抗である。この実践と抵抗を同時に生じさせる諸々の主体性に関しては、フロイトの解釈が、より良い説明を与えてくれるように思われる。［…］主体が反復しようと試みるのは、我有化すべき対象が、それに対して我有化すべきものとしての妥当性を失ってしまうセクシュアルな興奮、また、その妥当性の消失の結果として、我有化を行う自我の瓦解を本義とするようなセクシュアルな興奮である。〔そのとき〕我有化は、次のようなコミュニケーション、非対話的（non-dialogic）コミュニケーションへと変容する。それは、そこで主体が支配することを期待する対象によって、当の主体が極めてセクシュアルに「摩擦を受ける」ことで、主体と対象を隔てている諸々の境界そのもの、〔対象の〕所有のために必要なその諸々の境界が消え去るコミュニケーションである。（Bersani, 1995, p.100、亀甲カッコ内引用者）

フロイトの理論において「主体が反復しようと試みる」、「セクシュアルな興奮」は、特定の対象や身体領域に位置づけることが困難な現象だった。ゆえに、セクシュアリティにおいて、対象を「我有化」あるいは「支配」しようとすること（「権力の実践」）は、常に失敗を伴う（「我有化すべき対象が、それに対して我有化すべきものとしての妥当性を失ってしまうセクシュアルな興奮」）。そして、フロイトが明らかにしたクィアなセクシュアリティにおいては、あらゆる対象や身体領域がセクシュアルに触発しうるという「感応性」によって主体は瓦解するのだった。言い換えれば、「我有化を行う自我の瓦解を本義とするようなセクシュアルな興奮」が生じるのだ。

だが、上記でベルサーニが示唆しているのは、こうした「失敗」や「瓦解」は、それ自体で終わるわけではなく、何らかの関係性へと開かれているということだ。彼の言葉を借りれば、クィアなセクシュアリティは、「支配」のような権力関係が前提とする「主体と対象を隔てている諸々の境界そのもの、〔対象の〕所有のために必要なその諸々の境界が消え去るコミュニケーション」を発生させうるのだ。したがって、彼が指摘するのは、クィアなセクシュアリティにおける自己瓦解の経験は、ある種の関係性の契機でもあるということだ（言い換えれ

ば、彼が強調するセクシュアリティにおける自己瓦解の経験は、ある種の関係性の観点に開かれる「射程」を有する[3]。

では、このような関係性とは、どのようなものなのだろうか。上記の「非対話的コミュニケーション」という表現からは、ベルサーニが論じる関係性は、言語を介さない神秘主義的経験のように聞こえる。しかし、本論は、「非対話的」という言葉で彼が意図しているのは、ある種の抑圧関係を批判し、それとは別の関係性を狙うことだと考える。このことを証明するために、以下でM・ウィティッグの理論を参照したい。というのも、この抑圧関係のモデルを批判的に提供する理論として、『ホモズ』においてベルサーニはウィティッグの理論を参照しているからだ。

そこでまず、ウィティッグの理論においてベルサーニが特に注目するのが、彼女の論文“Straight Mind”（1980）で指摘される、「差異」概念に根差した以下のような抑圧関係の問題であることを見たい。

> もっとも興味深いこのウィティッグ議論の側面は［…］、彼女が差異に対して懐疑的であることだ。彼女は、差異それ自体の現象の構造をジェンダーと同一視することに抗議すること以上のことを行う。「差異を有した存在/他者（different/other）」[4] はつねに劣った位置にある［…］。「男たちも白人たちも差異を有さないし、主人たちも同様に差異を有さない。しかし、奴隷たちと同様に黒人たちは差異を有している」。それゆえ、彼女は次のように結論付ける。「差異の概念は、その概念についての存在論的な側面を何も有していない。差異の概念とは、主人たちが支配の歴史的状況を解釈するための方法でしかない」。（Bersani, 1995, p.39）

ウィティッグは、「差異」という概念が、「男と女」、「主人と奴隷」、「白人と黒

3　ベルサーニの理論は、クィア理論における「アンチソーシャル理論」の先駆けとしてまとめられ（cf. Caserio et al. 2006）、その独我論が批判されるが（cf. 井芹, 2013, p.47）、彼の理論は外部へと開かれたものである。この点に関しては、Tuhkanen（2020）、長尾（2023）を参照。

4　ベルサーニは「different-other」と表記しているが、ウィティッグの原文は「different/other」であるため（Wittig, 1992, p.29）このように訂正する。

人」といった支配関係において、女性や奴隷、黒人を劣位に置くためのある種の抑圧構造として機能していると批判する。そして、この「差異」に基づく抑圧構造を形成していると彼女が見なすのが「ストレートな思考（Straight mind）」と呼ばれる異性愛関係の構造である。例えば、「男女の異性の間の差異の概念は、女性を、差異を有した存在/他者へと存在論的に構成する」のだ（Wittig, 1992, p.29）。ベルサーニの言葉を借りれば、「異性愛は階級間の抑圧を、人間本性の恒常的な事実として固定化」し（Bersani, 1995, p.38）、「ストレートな思考は差異を〔抑圧的に〕価値づける」のである（Bersani, 1995, p.39、亀甲カッコ内引用者）。

このような異性愛関係に基づいた抑圧構造を表す具体例として、ベルサーニは、ウィティッグが“On The Social Contract”（1989）で取り上げた、アリストテレスの『政治学』における記述を参照する（cf. Bersani, 1995, p.38）。ウィティッグによれば、アリストテレスは『政治学』の中で「男と女」の異性愛の対関係を、「お互いが存在しないと無効」となる「一つの対になるべき」、すなわち「支配するものと支配されるもの」の関係とみなしている（Wittig, 1992, p.42）。ウィティッグはそれを「異性愛の関係性というもの」を「あらゆるヒエラルキーの関係の指標」として（ibid）、換言すれば、異性愛という社会契約が「暗黙のうちに」（Wittig, 1992, p.41）合意される事例として批判している。

M・ホークスワースが指摘するように、こうした女性を劣位に置く哲学の態度は、古代ギリシャ哲学から中世哲学を経て近代哲学にまで及ぶ（cf. ホークスワース, 2019=2022, pp.23-27）。例えば、20世紀フランスを代表する哲学者E・レヴィナスは、彼の主著『全体性と無限』（1961）において、女性性を「本当の発話を知らない無責任な動物性」（Levinas, 1961 = 1971, p.295）という劣位の立場に追いやっている。ホークスワースが述べるように、「西洋哲学の伝統の内部では、セックスの解釈はつねに、男性に権力と権利を付与する一方で、女性にはそれらを否定するという、二分法的な構造に依拠している」のだ（ホークスワース, 2019=2022, p.27）。

以上のような哲学の伝統が示すように、異性愛関係から示される「差異」は、ある種の抑圧関係を形成することに繋がっている。そして、ベルサーニは、ウィティッグが「ストレートな思考」と呼ぶ以上のような哲学の態度を、哲学が差異

を論じる際に参照する「弁証法的思考と対話（dialogue）」の内に見て取っている（Bersani, 1995, p.40）[5]。したがって、ベルサーニが「非対話的（non-dialogic）コミュニケーション」という概念で意図していたことは、こうした哲学の伝統、そして異性愛関係が内面化してしまっている差異に基づいた抑圧関係とは異なった関係性である。

そこでベルサーニは、差異に基づかない関係性を「ホモネス（homoness）」という概念から論じようと試みる。

> ホモネスに関する新しい省察が私たちにもたらす可能性があることは、差異による価値づけを適切に切り崩すこと――あるいは、より正確には、乗り越えられるべきトラウマとしての差異の概念（この観点は、とりわけ、男女の異性の間の対立関係を強めるものである）ではなく、むしろ、同じさ（sameness）を脅かすことなく、その補完となるような差異の概念である。（Bersani, 1995, p.7）

「ホモネス」とは、「男女の異性の間」に根差した「差異」という抑圧関係を「切り崩す」ものであり、そこで関係し合う項が「同じさ」という仕方で結びつく関係性である。そして、その「同じさ」を共有し合う項の間の差異もまた、関係しあう項の間の支配や抑圧といった対立（「トラウマとしての差異」）を生むのではなく、その「同じさ」という繋がり合いの「補完」となる関係性である。

ただし、このような「同じさ」の関係性は、主体のアイデンティティを固定化するものではない。ベルサーニの言葉を借りれば、「ホモネス」とは、「非アイデンティティ主義的な同じさ」という概念であり、そこで「自己のアイデンティティが、自己の外部で不正確に複製される」関係性である（Bersani, 2010, p.183、強調引用者）。つまり、「ホモネス」とは、主体が生きる何らかのアイデンティティが揺るがされつつ、「同じさ」を通じて、外部へと開かれる関係性だといえる。そして、そのように動揺するアイデンティティと外部へ開かれた関係

5　ベルサーニは次のウィティッグの発言を参照していると思われる。彼女によれば、「異性愛は、その主なカテゴリーとして弁証法的思考（あるいは差異の思考）のうちに暗黙のうちに入り込んでいるのだ」（Wittig, 1992, p.43）。

性の構造は、第一節で前述したベルサーニ自身のフロイト論から展開する自己瓦解の経験を基底としていることが指摘できる。

したがって、ベルサーニが「ホモネス」概念から捉えようとする関係性は、1）「差異」に基づいた権力関係や抑圧関係といった対立関係に還元されず、2）むしろ関係する項の「差異」がそれらの項の「同じさ」を肯定的に補完するものとなり、3）主体のアイデンティティが揺るがされつつ、その「同じさ」を通じて外部に開かれる、という構造である。では、このような彼の理論の「射程」は、具体的にどのような経験として立ち現れてくるのか。そこで次節と第四節では、この関係性論をトランスジェンダーの経験から具体化したい。

3 「ホモエラティックス」という「ホモネス」
――ベルサーニの理論の「射程」の可能性

『ホモズ』において「ホモネス」概念は、A・ジッド、M・プルースト、G・ジュネの作品におけるゲイ男性のセクシュアリティ表象から具体化されている（cf. Bersani, 1995, pp.113-181）。しかし、「ホモネス」概念の射程は、シスジェンダーのゲイ男性間の関係性に限定されるものではないと考えられる。実際、ベルサーニ自身も、2014年のインタビューにおいて、『ホモズ』における彼の関係性論が同性愛関係に限定されている点を、「あまりにも文字通り過ぎ、あまりにも恣意的だった」と自己批判し、この関係性論が他の関係性に開かれる可能性を示唆している（cf. Tuhkanen, 2014, p.280）。そこで以下では、「ホモネス」概念の射程をトランスジェンダーが生きる関係性の構造から具体化することを試みたい。そしてそのために、『身体を引き受ける』においてサラモンが提示する「ホモエラティックス（Homoerratics）」という概念を参照する（この概念は「同性愛」を意味する「ホモエロティック［homoerotic］」と、「逸脱した」を意味する「エラティック［erratic］」を掛け合わせた造語である）。

この概念を論じるために、サラモンは、「サンフランシスコで年中無休で「ダイク・バー」を自称し、掲げている」、レズビアン・バー、「レキシントン・クラブ」が2002年に発効した「「ボーイズ」・オブ・ザ・レックス」（Salamon, 2010, p.69）というカレンダーに掲載された写真を取り上げる。

モーガンの十二月の写真は、このバーの設立者であり、所有者であるリラを写している。彼女はアーモンの隣に立っている。アーモンはリラの隣に座っている、顎がシェービングの泡で覆われている男性である。リラは一方の手で彼のあごひげをつかみ、もう一方の手で剃刀をもって彼の顔の横に注意深く構えている。その写真はレキシントン・クラブではなく、別のバーであるイーグル・テイバーンで撮られている。そこは地元のレザーマンのバーであることが、写真の背景に写っている屈強な〔ゲイの〕ダディ（burly daddies）たちのグループや、（イーグルのバーテンダーである）アーモンが被っているバーのロゴの入ったベースボール・キャップから分かる。写真における男性性の流通は複雑なものだ。リラは女性に「読める」が、背景の男性の身体に対して前景化しているのは――文字通りにも、また形象的＝比喩的（figuratively）にも――彼女の男性性なのである。アーモンの位置は、まったく従属的なものというわけではない――彼は茶目っ気のある笑みを浮かべてレンズを直接見ている――が、しかし、彼のあごひげと男らしい顔はその前にある剃刀に傷つけられうるほど密接である。リラは彼女が髭剃りをする男性との場面を任されているだけでなく、より広い意味でレザーマンのバーで繰り広げられる男性性の場面をも司っている。その写真は、去勢する女というブッチ・レズビアンのステレオタイプを、準備万端のナイフで男性性を脅かすことで引用している。しかし、背景の男性たちの姿勢はリラックスしたフレンドリーなものである。そして、前方に写し出されている二人の人物の場面における危険な雰囲気は、お互いに対する二つの身体の態度によって和らげられており、その場面は、攻撃的というよりもむしろ温和なものである。ブッチ・レズビアンは男性性を攻撃しているのではなく、男性性とホモエロティックに戯れているのである。（Salamon, 2010, pp.69-70、亀甲カッコ内引用者）

リラは、アーモンの「あごひげをつかみ、もう一方の手で剃刀をもって彼の顔の横に注意深く構えている」。このリラのアーモンに対する関係は、彼を支配ないし抑圧する関係に表面上は見える。しかし、両者（そして、背景のレザーマンたち）の間に見られるのは「男性性を脅かす」あるいは「男性性を攻撃」する

という権力関係や抑圧関係ではなく、「男性性とホモエロティックに戯れる」肯定的な関係性である。事実、「背景の男性たちの姿勢はリラックスしたフレンドリーなものである。そして、前方に写し出されている二人の人物の場面における危険な雰囲気は、お互いに対する二つの身体の態度によって和らげられており、その場面は、攻撃的というよりもむしろ温和なもの」なのだ。

そして、サラモンは、「男性性とホモエロティックに戯れる」この関係性を、「ホモエラティックス」という観点から以下のように浮き彫りにする。

> 写真が表象しているのはある種の男性的なホモエロティックである。ただし、ホモエロティシズムあるいはホモセクシュアリティを「同一のものの愛」と解する一般的な理解では、このエロティシズムがどのように、セックス、ジェンダー、身体の水準での差異と他性に依存しているかを理解するのに不十分である。というのも、もしこれが類似性のエロティクスであるなら、類似性は決定的に差異を通して与えられているからである。写真に写っているすべての人は同じジェンダーに「属して」いると思う人もいるかもしれない（それは正しいかもしれないし、間違っているかもしれない）が、はっきりしているのは、彼らが同じセックスには属していないということである。写真のエロティックな力はこの同じさの内部の差異（difference within sameness）によって生み出されているのである。［…］このような文脈において、ホモエロティックはあまり役に立たない、味気のない形容詞であり、その〔写真の〕イメージによって生産されたリビドーと同一化の屈折にまったくついてゆくことができない。この写真の展示、及び、その文脈に基づいた用い方は、ホモエラティックと呼んだ方がよいだろう。つまり、同じさのリビドー経済の参与者はそれにもかかわらず、予測不可能な驚くべき仕方で、習慣的で予期された進路を踏み外し、彷徨うのであり、同じさのリビドー経済のエネルギーはまさにエロティックな同一化と交換の不安定性＝固定化しがたさ（unfixability）に依存しているのだ。（Salamon, 2010, pp.70-71、強調原典、下線、亀甲カッコ引用者）

サラモンが指摘するように、リラとアーモン、そして背景のレザーマンたち

の間のホモエロティシズムは、「同一のものの愛」に還元されない。彼ら、彼女らはある種の類似した仕方で「男性性」を共有しながらも、そこには「セックス、ジェンダー、身体の水準での差異と他性」の交錯――例えばリラとレザーマンたちは類似した男性性を共有しつつ、前者はブッチ・レズビアン、後者はゲイのレザーマンである――が生じている。すなわち、彼ら、彼女らのセクシュアルな関係性は、「同じさ」で繋がる関係性の内部の差異――「同じさの内部の差異」――を含む、「ホモエラティックス」なのだ。

この「ホモエラティックス」という関係性に、ベルサーニが論じた「ホモネス」という関係性を見て取ることができるだろう。というのも、この「ホモエラティック」な関係性は、「男性性」を介して他者を支配したり、抑圧したりするものではなく、関係しあう項の間の「差異」が、互いの「男性性」の類似性を肯定的に補完するもの（つまり、「男性性とホモエロティックに戯れる」ことを可能にするもの）として働いているからだ。つまり、サラモンが指摘する「同じさの内部の差異」は、ある種の類似性をその類似した項の間の差異が補完するという意味で、ベルサーニが「ホモネス」を通して論じた「同じさを脅かすことなく、その補完となるような差異」（Bersani, 1995, p.7）だといえる。

加えて、この「同じさの内部の差異」は、「習慣的で予期された」「ホモエロティシズム」（あるいは「ホモセクシュアリティ」）にアイデンティティが固定されない、すなわち「不安定性＝固定しがたさ」という自己瓦解の性質を抱えるがゆえに、互いが共有する男性性に「ホモエラティック」に関係する契機となっている。したがって、セクシュアリティにおける自己瓦解の経験（アイデンティティの「不安定性＝固定化しがたさ」）は、「同じさ」を通じた関係性（「エラティック」に共有される「男性性」）の契機となるのだ。

さらに言えば、サラモンが論じる以上のような関係性は、トランスジェンダーが生きる経験に開かれたものである。というのも、サラモンがその写真を分析した「レキシントン・クラブは、女であるかもしれないし、女ではないかもしれないボーイたちで満ちているだけではなく、女に同一化するフェム、そしてバトラーが述べているように「彼らのガールがボーイであることを好む」フェム、あるいはおそらく、彼らの「ボーイがガールであること」を求めるフェムによっても満たされており、そして、女であるかもしれないし、女ではないかもしれない

ボーイで、彼らのガールがボーイであることを好むボーイの数はそこで増加しており、ブッチとブッチのカップルやトランスとトランスのカップル、すなわちホモエラティックはますます目に付くようになっている」からだ（Salamon, 2010, p.93）。つまり、サラモンが論じる「同じさの内部の差異」の観点は、その射程がシスジェンダーの同性愛関係のみに限定されないどころか、トランスジェンダーも含む非規範的なジェンダーの人々のあいだでこそ増殖して（「ますます」）見出されるのだ。

したがって、ベルサーニの関係性論は、シスジェンダーのゲイ男性間の関係性に限定されるものではない。しかし、「ホモエラティック」概念がどのようにトランスジェンダーの経験の観点から具体化されるのかという点に関しては、サラモンの議論だけでは判然としない。そこで次節ではトランスジェンダーの語りを通じてこの概念を具体化したい。

4 「ホモエラティックス」を具体化する ——トランスの語りを通じて

前節で論じた「ホモエラティックス」概念を具体化するために、本節では、ROSの『トランスがわかりません！！』（2007）に掲載された瑞恵という名のトランスジェンダーの以下の語りをベルサーニの理論の観点から分析したい。この語りからは、ジェンダーとセクシュアリティの交錯、そして、ある種の「同じさ」を通じて自己の外部と肯定的に繋がる「ホモネス」のありようが現れている。

> いま一番しっくりきているのは、身体的には「男」だが、自分が「男」ではないと感じている人との関係である。その人は広い意味でのトランスといっていいかもしれない。わたしは自分が「女」であると感じていないし、その人は自分が「男」であるのに違和感・嫌悪感がある。外見でいえば男と女の取り合わせでも、二人のあいだで「男役」−「女役」をとることはほとんどない。二人の関係のなかでそういう役割をしなくていいからこそ、楽に一緒にいられるといってもいいだろう。外見から見てヘテロセクシャルなカップルでも、実際はそうとは限らないということだ。そういうわたしたち

のセクシュアリティは、一体何と呼んだらいいだろうか。（瑞恵, 2007, p.87）

「外見から見てヘテロセクシュアルなカップル」であっても、瑞恵は、「自分が「女」である」ことに揺らぎを感じ、パートナーも「男」であることに揺らぎを感じている。また、そうした揺らぐ自己のアイデンティティを、何らかのカテゴリーから言い表すことの困難さも瑞恵は語っている（cf. 瑞恵, 2007, pp.82-83）。そして、その揺らぐアイデンティティを生きる両者の関係性に対して、「そういうわたしたちのセクシュアリティは、一体何と呼んだらいいだろうか」という瑞恵の問いかけが、セクシュアリティを生きる自己と他者関係の交錯した揺れ動き——ジェンダー・アイデンティティの問題なのか、セクシュアル・オリエンテーションの問題なのかと切り分けることのできないトランスジェンダーの揺れ動きを伝えている。

だが、このような揺れ動く「わたしたちのセクシュアリティ」は、「しっくりきている」、「楽に一緒にいられる」と語られるように、互いに肯定的に関わる契機ともなっている。その理由の一つは、瑞恵もパートナーも、出生時に割り当てられた性別からの揺らぎを生きるという点である種の「同じさ」を共有しており、「「男役」-「女役」」という規範的な異性愛の性役割という「差異」に基づいた抑圧関係とは別の関係性を生きているからだといえる（「二人の関係のなかでそういう役割をしなくていいからこそ、楽に一緒にいられるといってもいいだろう」）。つまり、瑞恵とパートナーは、自らのアイデンティティが揺らぎつつ、その揺らぎの「同じさ」を通じて、自己の外部で繋がるという「自己のアイデンティティが、自己の外部で不正確に複製される」関係性を生きているのだといえる。

この意味で、瑞恵が語る「わたしたちのセクシュアリティ」は、異性愛の性役割のような差異に基づいた権力、抑圧関係とは異なり、ある種の自己の動揺、瓦解を契機とした、「同じさ」という「ホモネス」の関係性——あるいは両者に「トランス」という側面を見出すのなら——「ホモエラティックス」の関係性だといえないだろうか。実際、瑞恵のパートナーの「セックスの場面」での「感覚やファンタジー」は、「レズビアン系」だと指摘されている（瑞恵, 2007, p.88）。すなわち、瑞恵とパートナーの肯定的な関係性は、ベルサーニの理論の観点から

解釈可能なのだ。

したがって、ベルサーニの理論、そして「ホモエラティックス」概念は、トランスジェンダーの肯定的な生を浮き彫りにしうるものであり、トランスジェンダーの観点に開かれたものなのである。

おわりに

ベルサーニのクィア理論の読解を通じて、彼の理論枠組みにシスジェンダー中心主義へと還元されないセクシュアリティの議論を見出し、同時に、その理論の射程となる彼の関係性論をトランスジェンダーが生きる関係性の構造から具体化した。それゆえ、先行研究の批判に反して、ベルサーニの理論は、トランスジェンダー研究の文脈にひらかれた可能性を有していると指摘できる。

最後に、ベルサーニのクィア理論をトランスジェンダー研究の文脈へと接続する意義を論じて本論を締めくくりたい。

第一の意義は、トランスジェンダーにおけるジェンダーとセクシュアリティの交錯を理論的に浮き彫りにすることである。というのも、ベルサーニが論じる「ホモネス」の観点においては、自己と他者が「類似している」こと（ある種のジェンダー・アイデンティティの問題）と、自己と他者が自身と「同じもの」を欲望すること（ある種のセクシュアル・オリエンテーションの問題）が不可分な仕方で論じられているからだ。彼の言葉を借りれば、「ホモネス」的な欲望において、「所有したいという欲望」――つまりセクシュアル・オリエンテーションの欲望と、「存在したいという欲望」――つまりジェンダー・アイデンティティの欲望の間の「境界はより曖昧になる」のだ（Bersani, 1995, p.63）。これは、近年のトランスジェンダー研究において指摘される、トランスジェンダーの経験におけるジェンダーとセクシュアリティの交錯という論点――ジェンダー・アイデンティティの問題なのか、それともセクシュアル・オリエンテーションの問題なのかという二項対立に疑問を投げかける論点（cf. Bettcher, 2014、Salamon, 2010、佐川, 2023）を、クィア理論の観点から掘り下げることに繋がるだろう。

そして、なにより重要なのは、前節で証明したように、ベルサーニの関係性論からトランスジェンダーの経験を捉えるとき、トランスジェンダーの経験を、社会規範や差別構造との否定的な対比ではなく、彼ら、彼女らの肯定的な経験に基

づいて浮き彫りにすることが可能となることだ。確かに、現在の社会構造や法制度を鑑みたとき、トランスジェンダーがいかにシスジェンダー規範やトランス差別といった否定的な言説や眼差しから捉えられているかを論じることは極めて重要な問いである。しかし、他方でトランスジェンダーの人々は現にこの社会で生活をしており、他者や世界と肯定的に繋がってもいる。そうしたトランスジェンダーの肯定的な関係性を論じる一つの手がかりとして、権力関係や抑圧関係のような対立関係ではなく、「同じさ」を通じたある種の肯定的な関係性――トランスジェンダーの生／性の肯定的な現実を浮き彫りにしようとするベルサーニの関係性論が有効になるのではないだろうか。

こうした可能性を持つ彼の理論を解いてゆくことは、さらにトランスジェンダーの人々が自己の外部と肯定的に繋がる仕方を理論的に明らかにすることに繋がるだろう。この本論以降の課題を提起して本論を閉じたい。

謝辞

本論の執筆にあたって、徳山晶さんから貴重なアドバイスを頂いた。この場を借りて御礼申し上げる。

References

Bersani, L. (1986). *The Freudian Body*, Columbia University Press.

Bersani, L. (1995). *Homos*, Harvard University Press.

Bersani, L. (2010). *Is the Rectum a Grave and Other Essays*, The University of Chicago Press.

Bettcher, T. M. (2014). "When Selves Have Sex: What the Phenomenology of Trans Sexuality Can Teach About Sexual Orientation". Journal of Homosexuality, 61(5), 605-620.

Caserio, R, et al. (2006). "The Antisocial Thesis in Queer Theory", *PMLA*, 121(3), 819-828.

Halberstam, J. (2008). "The Anti-Social Turn in Queer Studies", Graduate Journal of Social Science, 5(2), 140-156.

Levinas, E. (1961=1971). *Totalité et infini* , Martinus Nijhoff, «Le Livre de Poche».

Muñoz, J. E. (2009). *Cruising Utopia*. New York University Press.

Salamon, G. (2010). *Assuming A Body*. Columbia University Press. (＝ゲイル・サラモン［2019］.『身体を引き受ける』藤高和輝訳. 以文社).

Stryker, S. (2004). "Transgender Studies: Queer Theory's Evil Twin", *GLQ*, 10(2), 212-215.

Tuhkanen, M. (2014). *Leo Bersani*. State University of New York Press.

Tukanen, M. (2020). *Leo Bersani*, BLOOMSBURY ACADEMIC.

Wittig, M. (1992). *The Straight Mind and Other Essays*. Beacon Press.

井芹真紀子.（2013）.「クィア・ネガティヴィティと強制的な健常的身体」,『論叢クィア』, 6, 37-57.

メアリー・ホークスワース.（2019=2022）.『ジェンダーと政治理論』明石書店.

村山敏勝.（2005=2022）.『（見えない）欲望へ向けて』ちくま学芸文庫.

長尾優希.（2023）.「ベルサーニの暴力的ケア／サエボーグの横滑りする身体」,『ジェンダー＆セクシュアリティ』, 18, 51-75.

瑞恵.（2007）.「関係が変える私の性」ROS編.『トランスがわかりません！！』アットワークス, 82-88.

佐川魅恵.（2023）.「「性的な存在」の関係論的形成：恋愛／性愛における違和の経験に着目して」,『ジェンダー＆セクシュアリティ』, 18, 27-50.

ジークムント・フロイト.（1905 = 2009）.「性理論のための三篇」, 渡邉俊之・越智和弘・草野シュワルツ美穂子・道旗泰三訳『フロイト全集6』岩波書店, 164-310.

Abstract

Transcending Bersani: The Possibility of Transreading in Bersani's Queer Theory

Asahi KONUTA

This paper aims to articulate a transgender standpoint within the queer theory of Leo Bersani. Although some theorists have criticized Bersani's queer theory for centering cisgender gay men, some implications of his theories may extend to transgender issues.

In the first section of the paper, I offer a transgender reading of Bersani's interpretations of Freudian sexual theory in Freudian Body. This reading shows that Bersani's sexual theory includes structures of sexuality that transgender people may experience.

In the second section of the paper, I deal with Bersani's theory of relationality, which he calls "homoness". In Homos, he tries to discuss how people can connect without oppressing one another. To that end, he shows the value of relations of sameness, in opposition to the otherness of heterosexual relationality. Although Bersani sees homosexual relationality, or "homoness", as the realization of these relations of sameness, he extends this beyond homosexual relationality, and it is therefore possible to apply it to transgender relationality.

In the third section of the paper, I embody Bersani's theory of homoness through Gayle Salamon's theory of transgender relationality, "homoerratics". Homoerratics describes a kind of transgender homoeroticism, and is therefore pertinent to the realization of homoness.

In the final section of the paper, through analyzing the narrative of transgender person, I demonstrate that Bersani's theory, which has been highlighted in this paper, can theoretically capture the structure of positive relationality among transgender people. And from this point, I point out the significance of applying his theory to transgender studies.

Keywords:

Leo Bersani, queer theory, transgender studies, homoness, homoerratics